

朝の時間帯を車両通行止め 商店街で社会実験を実施

問 にぎわい商業課 ☎027-210-2188



前橋中央通り商店街と弁天通り商店街で、朝の時間帯を車両通行止めにする社会実験を実施します。両商店街は6時から10時まで一般車両が通行可能ですが、通学時間と重なるため非常に危険。そのため地元商店街が中心となり、将来的な終日車両進入規制を見据え、朝の時間帯を車両通行止めにする取り組みを実施します。期間中は終日車両での進入はできません。自転車や緊急車両、許可車両は進入可能。高崎・渋川方面へ行く際は、国道17号や千代田通り、県道前橋赤城線などの周辺道路を利用してください。

時 2月18日(水)～27日(金)

場 前橋中央通り商店街・弁天通り商店街



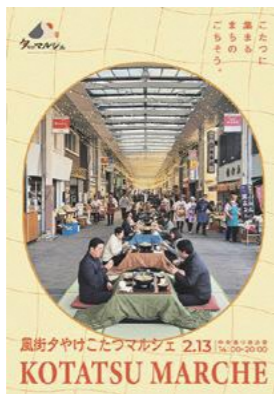
まちなかで温まろう 風街タヤけこたつマルシェ

問 同マルシェ実行委員会 ✉info.kmym@gmail.com

中央通り商店街アーケードに1日限定でこたつがたくさん出現。寒い中、こたつで温かグルメを食べたり飲んだり、ぽかぽか気分を味わえます。

時 2月13日(金) 14時～20時

場 中央通り商店街



春の催しに向け ワークショップ開催

問 馬場川通りを良くする会
✉babakkawa.st@gmail.com

馬場川通りを舞台にアイデアをカタチにする企画「ネクストマチクリエイターズ」を開催します。

時 2月14日(土)・28日(土)、10時～12時

場 中央公民館

申 二次元コードのホームページで



百年構想リーグに挑む ザスパ群馬を応援しよう

問 スポーツ課
☎027-898-6990

©THESPA

今シーズンも沖田優監督がザスパ群馬の指揮を執ります。昨シーズンから掲げる「超攻撃的サッカー」を継続し、上位カテゴリーのクラブとも対戦する明治安田J2・J3百年構想リーグに挑みます。

チームは昨シーズン、キャプテンを務めた米原秀亮選手や、チーム得点王の西村恭史選手との契約を更新。さらに、後半戦で攻撃のキーマンとして活躍した山口一真選手を松本山雅FCから完全移籍で獲得し、今シーズンは背番号10を背負います。



米原 秀亮選手



西村 恭史選手



山口 一真選手



沖田監督コメント

昨シーズンは、選手・スタッフ・強化部・フロント・スポンサーの皆さま、そしてサポーターの皆さまとともに、攻撃的マインドを持ったチームとして大きく安定した土台を築くことができました。シーズン終盤には6連勝16得点という結果も残すことができました。今シーズンは結果はもちろん、あらゆる面で積み重ねを続け、ザスパ群馬がより良いクラブとなるよう、ともに創り上げていきたいと思ひます。よろしくお願いいたします。

●明治安田J2・J3百年構想リーグのホーム戦試合情報

場 正田醤油スタジアム

開催日	時間	対戦相手
2月14日(土)	14時	ヴァンラーレ八戸
2月21日(土)		モンテディオ山形
2月28日(土)		ブラウブリッツ秋田

Vol.2 街づくりとアート

市文化芸術戦略顧問・南條史生

問 文化国際課 ☎027-898-6516

本コラムは「街づくりとアート」をテーマに、市文化芸術戦略顧問でアーツ前橋特別館長の南條史生が3回にわたり連載します。

アートを生かした街づくりを考えたときに美術館は大変重要である。というのも、昨今、美術館は、単に美術を保存し、学術的な展覧会を開催するだけでなく、街に開いて、市民と交流し、街のイメージを文化・芸術と結びつけて、街のイメージアップの役に立たいという要請があるからだ。令和5年度にアーツ前橋が開催した開館10周年記念展「ニューホライズン」は、そうした試みの良い事例だった。

ひとつの廃ビルでは4フロアにアーティスト達の作品が展示された。また、百貨店やお店の中も展示の場所にしてしまった。これを成功させるためには、キュレーターやアーティストもフレキシブルなアイデアが

出せなければならない。

もっとも建物の管理を抱え、制度として存在する美術館はなんでも自由にやれるわけではない。また、美術館は一度始めたら止められない。必要な年間予算も半端な額ではない。ということで、街が美術館を持つということはそれなりに覚悟がいる。

美術館にはリソースがある。ひとつには美術情報であり、ひとつは専門家の人材である。これらを柔軟に使うと、例えばパブリックアートを提案、展開することに協力できるだろう。また、街で芸術祭があればその一翼を担い、活動の幅を広げる機会になるだろう。美術館側と市民の協働があれば街は文化的に発展するはずだ。

前橋市民の方々は、これからのアーツ前橋を支援し、育て、より大きなものに発展させてほしい。それは、市民の皆さんの参加、支援、建設的な意見によって可能になる。街はそのような形で、文化芸術と共に成長し、発展するのが本来の姿なのではないだろうか。

